

東京大学 文系

—Part 2—

うめざわ ゆう た
梅澤 優太さん(文Ⅱ・筑波大附属駒場)

はすみ こう き
蓮見 厚輝さん(文Ⅰ・筑波大附属駒場)

ふじもと かず き
藤本 一輝さん(文Ⅰ・麻布)

みなみ
南 あかねさん(文Ⅲ・桜蔭)

グノの先生方は、個性による違いはあっても、基本的な授業スタイルは全員同じです。学校行事や体調不良でいつもとは違う先生に振り替えても、違う教え方をされることがありません。

南 あかねさん(文Ⅲ・桜蔭)

目次

●入塾のきっかけ	P10
●グノーブルの評判	P11
●グノーブルの英語	P11
●英語の勉強法	P12
●グノーブルの数学	P13
●グノーブルの国語	P13
●グノーブルの先生方	P14
●グノーブルのシステム	P15
●後輩へのメッセージ	P15

※●は、このPDF フルバージョンのみの掲載項目

入塾のきっかけ

梅澤:「英語ならグノ」というイメージがありました。高1のときに「そろそろ勉強しないと」と焦りを感じて、まずは英語から始めることにしました。そこでまっさきに候補に挙がったのがグノでした。英語で入塾して、後から国語も受講しました。

塾の選択肢はいくつかありましたが、他とは異なる魅力がグノにはありました。生徒一人ひとりの自主性にきちんと向き合ってくれる雰囲気が入塾の決め手でした。

蓮見:僕はもともと英語が得意でした。でも、高2の夏に「受験があるのでやっぱり塾に通おう」と思って塾を検討しました。候補が複数ある中で、梅澤君が通っていたグノは評判も高く、とりあえず夏期講習を受講してみました。熱意のこもった英語の授業に引き込まれ、これがきっかけで通常授業でもグノに通うことにしました。

南:高1から英語をサボっていた私は、「そろそろ真面目に勉強しないと」と思って塾を探しました。高校で通う塾としては、長文をたくさん読めることと、同時に文法事項もきちんと教えてくれるスタイルを求めています。友達に話を聞いたりもしましたが、母がグノを勧めてくれたのが一番大きかったです。高2の春期講習から英語を、高2の夏期講習から数学を受講しました。

藤本:高1になるときに大学受験を意識して塾探しを始めました。グノには部活の友人が通っていて評判を聞いていました。そこで、フレッシュアーズ講座[※]に参加したのです。そのとき、先生が僕のことを最初に名前でご覧になって、「名前を覚えてくれている!」と運命的なものを感じました。「グノに入りなさい」という啓示でした(笑)。英語と数学を両方とも高1の頭から通い始めました。

※新高1生対象の春期講習。



南 あかねさん(文Ⅲ・桜蔭)



梅澤 優太さん(文Ⅱ・筑波大附属駒場)

グノーブルの評判

藤本:「英語ができる! 伸びる!」というのがグノの評判でした。実際、成績上位層にグノ生が多かったです。

南:桜蔭にもグノ生が何人もいて、みんなグノのことが大好きなんです。グノ生同士で、授業の話や先生トークで盛り上がっていました。

蓮見:筑駒では英語で通っている人が多かったです。もともと「英語はグノが強い」と評判でしたから。先輩にも後輩にもグノ生がいて、学校全体に浸透してきた感じがあります。

梅澤:グノは柔軟性が高く、授業を振り替えられるのが大きいと思います。筑駒は行事が盛んだし、僕みたいに夏まで部活に打ち込もうとすると、グノのシステムは大変ありがたかったです。

グノーブルの英語

梅澤:高1からずっとグノに通っていて、毎回の授業を通して、自然な英文の読み方が自分の中に浸透してきました。中学の間は全く勉強していなくて塾にも通っておらず、英語は学校の宿題に取り組む程度でした。そんな僕だからこそ、市販の単語帳を使わないとか、返り読みはしないなどのグノの方針にスムーズに馴染めたのかもしれない。

グノの英語では、スピードを鍛えられました。東大の問題は時間に対して英文の量が多いので、それをパッと読む上で、グノの普段の演習が役立ちました。

蓮見:僕は英語が好きで、高1で英検準1級を取得しました。そのときは英語と日本語を一对一の対応で英単語を暗記しました。そういう暗記法しか知らなかった僕にとって、語源から単語を説明するグノの解説は新鮮でした。いくつもの単語が語根からつながっていくことを知って、言語としての英語の面白さに目覚めました。

南:言葉の持つイメージから単語を説明してくださるので、私も入りやすかったです。英文中に見たことのない単語があってもその意味を推測できる場面が増えました。偏と旁からできている漢字を見て意味が分かるように、語源のイメージから単語を推測する楽しさがありました。

それから、タイムリーな話題を初めとして幅広い分野の英文を読めるのもグノの魅力でした。最新のサイエンスのトピックスにも触れられて、文系の私にとっては縁遠かった分野にも興味が芽生え、関心の幅がどんどん広がりました。自分の教養の裾野が広がって、初見の英文への対応力も徐々にについていったと思います。

蓮見:確かに、時事的な話題や科学的な話題、美学や哲学の話題など、好奇心を刺激する英文ばかりでした。首相官邸のドローンや、サミットの開催地が伊勢志摩に決まったときの英文など、時事ネタもあって、新鮮な英語に触れていると印象深いので、新たな知識もしっかり定着しました。興味が持てる英文を用意してもらえると、楽しんで英文に向かえるので効果が高いと思います。模試でもいつも英語の偏差値は高いところで安定していましたが、グノのおかげがかなりあると思っています。

藤本:グノは市販の単語帳を使わずに、単語自体の根幹にあるイメージを重視します。そのおかげで、僕は、機械的に訳語を当てる作業から脱却できました。

英単語を機械的に日本語に置換していく読解には限界があります。英文の内容と自分の内側にある教養とを照らし合わせて、「ああ、あの話題について書かれている」という感覚を得られると、多少難解な英文でも読みやすくなります。

グノでは、抽象度が高い英文や分かりにくい英文については、先生が背景知識まで丁寧に解説してくださいます。そうして理解したことは記憶に残りやすく、音読する際にも先生の解説が蘇ってきます。授業から時間が経っても、「あんなエピソードがあったな」と復習の助けになりました。



蓮見 厚輝さん(文I・筑波大附属駒場)



藤本 一輝さん(文I・麻布)

英語の勉強法

藤本: 英語に毎日触れないと英語力が劣化してしまうので、少しでも時間を確保して、毎日音読に取り組みました。ただ、机に向かって時間を決めて音読していたわけではなく、寝転がりながらだったり、隙間時間を利用したりして継続しました。100円ショップで購入した防水ジップにプリントを入れて、入浴中も音読しました。

理解できていない英文を音読しても意味がありません。解説を聞いて理解した英文だからこそ、音読を繰り返すことでより深い理解につながるし、英語力向上のための基礎トレとしての効果も高まります。だから、音読と授業はセットです。授業の復習として音読するという姿勢が大切です。復習中心の勉強を続けていたら、高3の秋から冬にかけて英語力がグンと上がりました。

南: 私も音読を大切にしていました。その準備のために、授業を聞きながら、先生が黒板にお書きになったことやおっしゃったことを、とにかく書きなぐりました。人にお見せできるようなものではありません（笑）。後でまとめ直すようなまめなことも一切しませんでした。

家で音読するときには、それをすぐに見られるようにしておいて、引かなかったときは見直して大切なことの記憶をブラッシュアップしていました。

私の場合、英語が伸び始めたのは高3の秋からで、音読に真面目に取り組んだ成果がその頃になって表れ始めたのだと思います。

梅澤: 僕も音読やリスニングにはきちんと取り組みましたが、高1の頃はそれ以上に授業を大切にしました。

最初は本当に何もできず、クラスも a_2 だったので、「授業の内容を全部頭に叩き込むぞ!」という気持ちで授業に参加していました。当時は、先生のおっしゃったことをほぼ全部ノートにとっていました。周りの人たちが知っていることを僕は知らなかったもので、本当に何から何まで書き取りました。

中学時代は本当に何も勉強していなかったもので、 a_2 に入れたのも、今思うとまぐれでした。とはいえ、上に a があることは知っていたので、「早く上のクラスに上がりたい!」と必死でした。

高3になると、英語だけに時間を割けなくなりましたが、当初の向上心だけは引き継いで英語の勉強を続けて、音読やリスニングは相当やっていました。

クラスが上がるたびにカルチャーショックを受けたのも大きかったです。特に a に上がったとき、その雰囲気は一瞬圧倒されました。でも、「この人たちよりできるようになったら、東大にも絶対に受かるはず。この人たちを全員倒すぞ!」と気持ちを引き締めました。

※この学年の英語は、高1まで a （最上位）から、 a_1 、 a_2 、 a_3 の設定。高2から a_4 、 a_5 が順次追加されました。

南: 私はほとんどずっと a_2 でした。でも、「今いる場所で頑張ろう!ここで一番になれば、 a_1 の真ん中の層には食い込めるはず!」と思って、諦めることなく頑張り続けました。

a_2 の先生もとても熱心で、私たちが苦手なところは繰り返し指導していただけたし、添削もとても丁寧でした。たとえば英作文の添削の場合、間違っているところにただ線が引かれるだけでなく、「ここはこうじゃなくてこう」ということを書き込んでいただき、それをまた黒板でも解説をしていただきました。

黒板を使った解説は貴重です。みんなの答案を添削した先生には、多くの人が引っかけやすい間違いが分かっているらしいです。そこを説明していただけるので、クラス全体で間違いが共有できます。「確かに私もここで引っかけそうだ」という指摘が毎回必ずあって、他の人の間違いからも参考になることをたくさん学べました。

蓮見: グノの演習で集中する時間を大切にしていました。グノは教室もきれいだし、周りの人も演習が始まるとすぐに真剣になっていたの、いつもいい刺激を脳にもらっている感じでした。



梅澤 優太さん(文Ⅱ・筑波大附属駒場)

僕にとっては、演習プリントを読むだけなら難しくはありませんでした。でも、授業中に要約を書いてみると全然書けなくて、理解したことを相手に正確に伝えるのは、自分が読めた気になるのと違うと毎回実感させられました。記述力向上に役立つコメントをいただいたり、解説からたくさんのことに気づいたり、授業でしか得られない経験は本当に貴重でした。

藤本: 東大の問題はボリュームが多くてスピードも問われます。その点、スピードがあって、かつ丁寧なグノの授業は有益でした。授業内演習だと時間が区切られるので、少なくない課題を決められた時間でこなす練習になりました。

南: 英語だけでなく数学にも言えることですが、グノのクラス分けテストの方が東大よりよっぽど大変だと思いました（笑）。

梅澤: 東大には東大の難しさがあると思いますが、英語を読むスピードや読解力、要約力、作文力などは、グノのおかげで飛躍的に伸びました。

蓮見: 単に受験テクニックを磨くために英文を使うのではなく、英文の内容に焦点を当てたり、関連するテーマに興味を持ってさらに見識を深めたりという学習態度を養えたのが、東大の入試でも役に立ちました。実際、梅澤君のところにも僕のところにも TLP（トライリンガル・プログラム）※の通知が来ましたから、入試本番でも英語は結構得点できたのだと思います。

※入学時に一定レベルの英語力を有すると認められた学生（上位一割程度）のうち希望者を対象に行われ、日本語と英語に加え、もう一つの外国語の運用能力を鍛える教育プログラム。（<http://www.cgcs.c.u-tokyo.ac.jp/tlp/>）



蓮見 厚輝さん(文I・筑波大附属駒場)

グノーブルの数学

藤本: グノの数学は、生徒が問題を解いて先生が解説するだけの授業とは異なります。普通は、扱う問題に対しての解き方を提示するのが授業で、場合によってはそれに終始しているかもしれません。

グノの場合は、思考のプロセスを重視する授業でした。途中で詰まってしまうアプローチの例も示されて、なぜそれでは正解に至れないのかの理由も解説されました。また、正解に至れるプロセスには必然性があるはずですが、それも明確に理解できるようになるのが特長だと思います。

南: グノの文系数学では言葉をすごく巧みに使います。「こうなってこうなる」「こういうことをしてはいけない。なぜならこういうことだから」という考え方の道筋を言葉で説明してくださいました。高2の夏期講習で触れたその解説は馴染みやすく感じられたのですが、扱う問題があまりにも難し過ぎたので不安にも駆られました。

そこで、他塾の数学もいくつか体験してみましたが、結局どこもじっくりこなくて、「グノーブルが一番いい」という結論に至りました。

とはいえ、難し過ぎることに変わりはありませんので、「ちょっと私には難し過ぎませんか?」と先生に直接ぶつけてみました。そのときの先生のお答えに私自身納得ができたのと、先生に相談させていただいて勉強の方針も立てられたので、グノでやっていく決心が固まりました。

数学も英語と同じで、先生は親身に面倒を見てくださいますし、添削もしっかりやってくださいます。基本的な質問や漠然とした質問にも丁寧に応えてくださったので、難しくても信じて通い続けられました。

グノーブルの国語

梅澤: 高1で古文、高2で現代文、高3で東大国語を受講しました。3年間ずっと同じ先生のお世話になりました。最初の頃の僕は、「英語を頑張らなきゃ!」と意気込む一方で他の科目まで手が回らず、古文の授業ではやる気がありませんでした。

「高1だからいいかな」という甘い考えがあったのも事実です。そんな僕に先生は粘り強く教えてくださいました。

僕は本を読むのが好きで国語も得意でした。だから、「大丈夫!」と高を括って

いましたが、古文だけはちゃんと勉強しなければいけないという現実と向き合うことになりました。高1の夏には授業プリントを全部ノートに写して、単語と文法を自分なりにガンガン書き込む、という勉強をしました。そうしたら成績が急上昇しました。高2の現代文と高3の東大国語に関しては、授業に勉強をしに行くというよりは、自分なりの解答を先生に見てもらって客観的な判断をいただくのと、それによって安心感を得るために通っていました。いつも気持ちよく個別に対応していただけたことに本当に感謝しています。

グノーブルの先生方

梅澤:先生たちからいつも温かい眼差しで見守ってもらえたことに感謝しています。

a2からaに上がった直後は、周りとの差を目の当たりにして僕としては結構辛い気持ちでした。何か直接声をかけていただいたわけではありませんが、気持ちを盛り上げていただいたり、背中を押していただいたりと、大変お世話になりました。たとえば、「来いよ!」というところで当ててもらえて、「よし!」と思ったことが何度もありました。逆に、分からないところで当てられて、「うわっ」となったこともありましたが(笑)。

上手く僕たちの意欲を引き出していただけて、今考えると、本当にありがたかったと感謝しています。

高3では、読解の先生とも、作文の先生とも、添削を通してつながっていた感じがありました。話を直接交わすことがなくても、授業中のやりとりや添削を通していつも応援していただいていたのだと思います。

グノの先生に一貫性があったのも勉強のしやすさにつながっていました。高2から高3になって先生が変わっても、科目が変わっても、教え方にも、生徒に接する先生方の態度にも、グノには共通するものがあったと思います。

蓮見:文化祭に向けての準備が忙しかったとき、振替のシステムにもずいぶん助けられました。先生の励ましもありがたかったです。高2のときは実行委員会の副委員長をやっていて、高3のときも演劇のキャストをやっていて、本当に大変な時期がありました。そんなときに、「文化祭の準備頑張ってるね」とか、「文化祭を楽しみにしているね」と先生から声をかけていただいていた。先生方が学校行事に理解を示してくださっていたことがとても嬉しかったですね。

南:グノの先生は、最後まで支えてくださった存在でした。二次試験初日の朝、駒場東大前で先生たちを見つけたときの安心感は忘れられません。

普段の授業でも、私たちのことをよく見てくださるので、必要なことを本当に真剣に教えていただけました。生徒ができることを前提とせず、大切なことや基本的なことは何度も繰り返してくださったので、こっちも、「はい、そこ曖昧なままです」という気持ちでどんどん知識を吸収することができました。

グノの先生方は、個性による違いはあっても、基本的な授業スタイルは全員同じです。学校行事や体調不良でいつもとは違う先生に振り替えても、違う教え方をされることがありません。

それに、先生方同士も敬意を持たれているのが分かって、いつも安心して授業を受けられました。

藤本:先生の思い出といえば高3の英作文の授業です。いつも穏やかな雰囲気で、落ち着いた癒しのひとときでした。受験が大詰めになってくる時期でも、心の平穏を保てる授業が励みになりました。

南:落ち着いたたたずまいのダンディな先生だと桜蔭でも評判でした(笑)。

蓮見:多分、他の予備校や塾だと、受験直前期は切羽詰まった雰囲気になると思います。最後の授業では、檄を飛ばしたりとか。グノは比較的いつも通りの落ち着いた雰囲気だったと思います。そのおかげで、本番も平常心で臨めました。



藤本 一輝さん(文I・麻布)

グノーブルのシステム

藤本:生徒と先生の距離の近さが一番の魅力でした。教室自体がそんなに大きくなくて、ちょうどいい人数だったので、物理的に距離が近かったです。

そして、先生に質問したり添削をしていただいたりする中で、心理的な距離の近さも感じました。グノに通っていてよかったと心から思います。

南:先生が初回の授業で生徒全員の名前を覚えてくださいます。どの先生も私たちのことを尊重してくださっているからだと思っていました。

こういうところも含めて、グノは一貫していました。どの科目の先生も、受付の方も、全体を通してグノはグノだったので、いつも自分の望んでいる授業や応対を受けられました。

蓮見:知的に活発で、教養溢れる授業が僕は好きでした。教室もシンプルできれいで明るくて、そこで集中して取り組めることが気に入っていました。他の大手では、受験色が強い解説がおこなわれたり、教室の中にいろいろ貼ってあったりということもありましたが、グノの知的なシンプルさは独特で、とても気に入っていました。

梅澤:僕は、先生方が自分を見てくださっていることをすごく感じていて、それがいい緊張感につながっていました。出来がよければ嬉しいコメントつきでしたし、ダメだったときも「どこがダメだったのか？」をしっかり指摘していただきました。多分、これはベースに深い信頼があるから実現できることだと思います。僕自身は、グノの恵まれた環境を比較的上手く活用できていたように思います。

南:延長のことに触れておきたいです。塾に行くときは開いていた渋谷ヒカリエが、塾から帰るときにはいつも閉まっていました。それぐらい授業は長引きます(笑)。でも、私は延長大歓迎でした。楽しい時間はいつまでも続いてほしいものですし、グノの授業に慣れると家での長時間勉強が苦痛にならなくなりました。

母は最初、グノの授業料について「ちょっと高い」と言っていましたが、少し経ったら、「こんなに延長してくれるなんて、ものすごくお得じゃない!」と大絶賛でした(笑)。



南 あかねさん(文Ⅲ・桜蔭)

後輩へのメッセージ

藤本:授業の復習を怠ってはいけません。予習より復習中心に、授業のエッセンスをしゃぶりつくしてください。授業や教材、周りの仲間からあらゆるものを吸収してほしいです。

南:グノの場合、クラスがトップでなくとも十分戦えます。

私は、数学が一番下のクラスでしたし、英語もほとんど $a2$ でしたが、十分に大丈夫でした。グノでクラスが低いことは絶望する理由にはならないです。どのクラスでも先生の質は高いですし、「今いるクラスでてっぺんを取る!」という気持ちで、自信を持って、めげずに勉強してください。

蓮見:苦手だと思い込んでいた科目や分野にあえて取り組んでみると、意外な面白さに気づくことがあります。僕も、数学のある単元がすごく苦手でしたが、真面目に取り組んでみたら、「あれ?いける!」となって逆に得意になりました。

東大は総合力勝負なので、何事も苦手と決めつけずに、幅広い視野を持って毎日努力を重ねてください。

梅澤:グノの先生は、生徒が自分で考える姿勢を応援してくださっていると思います。僕も、自分の勉強を自分で引き受けて、自分で考えていく姿勢を鍛えていくことで合格は近づくと感じます。

その一方で、何事も全部一人でやれるわけではありませんから、グノの環境を活かしてほしいと思います。グノでは、先生にすぐ質問できるし、競い合えるライバルも身近にいます。とても恵まれた環境なのでしっかり活かしてください。